教示作業の組織化のデザイン

――学習者による利用可能性の視点から――

北海学園大学　　五十嵐素子

1　目的

教育実践の質的研究において、教師の教示作業（instruction）は、いかに児童・生徒の学習を促しているのかを明らかにする意味で、重要な研究対象の一つになりつつある。しかしそれがどのような活動として捉えられ、どのように組織されているのかという点については、その活動の生じる場面や、形態の多様さゆえに述べられていることが少ない。例えば、エスノメソドロジー・会話分析の研究群においては、教示作業の相互行為を事例に含んだ研究が数多くある。だがそれらの研究群の多くは、教示作業そのものが考察の対象とされているわけではないため、その性格についても多くは述べられてはいない。そこで本研究では、先行研究の視点や知見に基づきながら、教示作業の組織化を、より学習者と関係づけて考察するための研究上の方針を検討し、これに基づいて、学校教育における教示作業について理解することを試みたい。

２　方法

本研究では、まず、エスノメソドロジー・会話分析の研究群において、学校教育にとどまらず、教示作業の相互行為のあり方に関わる研究の事例をその知見とともに検討する。そこから教示作業の組織化を検討するにあたっての考察の方針を模索する。さらに、その方針のもとで、これまでに継続的な調査により収集してきた教育実践の事例を用いて、どのように教示が組み立てられているのかという点を検討する。

３　結論と結果

教示作業の相互行為のあり方に関わる先行研究を概観すると、その考察の焦点となりうる事象は二つに大別できると思われた。一つは、①教示作業の組織化を支える行為規範の利用が、学習者の参加のありかたや学習過程にどのように寄与しているのかについて（Mehan1975，Heap1985,1988, Lerner 1995,西阪 2008，Zemel&Koschmann2009, Lindwall & Ekstrom 2012）、二つ目は、②教示対象がいかに知覚の焦点として構造化されるのか、またそれがなされるにあたっての環境上の資源の利用のされ方について（Goodwin1994, Lynch&Macbeth1998, 西阪 2008, Lindwall & Ekstrom 2012）である。特に、西阪（2008）は①と②の両方の事象の双方を考察をしているが、そこで示された事例においては、教師による教示作業の組織化のされ方がその後の学習者の学習過程に志向されたものであったこと、あるいは、教示作業の組織化のされ方が学習者に利用可能なものとなっていたことが示唆されている。これらの点を踏まえると、教示作業の組織化のあり方は、①と②の視点から明らかにすることが可能であるが、その前提として教示作業がどのように学習者に利用可能なものとして組み立てられているのか（あるいは結果として利用されたのか）という視点に①や②を関連づけて考察することが可能であると考えられた。そこで本研究ではこの方針に基づいて、学校教育における教示作業の複数の事例を検討した。その結果、教示作業がどのような資源を用いていかに知覚の焦点として組織化されるのかは、そこで児童・生徒が行うことが期待されている経験や行為に対していかに配置されるのかと関係していること、また、学習者の行為がそこでどのように組織される（べきである）のかを投射していること。加えて、そうした教示行為に関わる、学習者の参加の配置のされ方は、授業の行為規範に支えられていること、等が明らかになった。

文献　西阪仰（2008）「何の学習か」『分散する身体』, pp.53-118,　勁草書房